



# 朝十小だより

継承とさらなる発展、新たな挑戦

～ 豊かな学びで喜びと笑顔あふれる朝霞十小 ～

朝霞市立朝霞第十小学校

発行日 令和3年5月6日

〒351-0023

朝霞市大字溝沼828番地の1

TEL 048-469-5443

在籍児童数 688名

## 啐啄の機（そったくのき）

校長 宮澤好春

「立夏」を迎え、校庭の木々も新緑が鮮やかに生える季節となりました。新年度が始まってまもなく一ヶ月が過ぎようとしています。1年生も給食や清掃が始まり、担任や補助員さん、そして5・6年生にお手伝いをしてもらいながら自分たちで配膳や片付け、掃除等の活動に一生懸命に取り組んでいる姿が見られます。また、昨年度できなかった音楽朝会（放送による6年校歌斉唱）、体育朝会（分散による開催）も再開しました。さらに、学校ファームで種蒔きをしたり、タブレット端末を手に空の写真を撮ったり、新体力テストの種目練習をしたりと、「新しい生活様式」に則り、様々な豊かな学びが始まっています。

さて、今月は「啐啄の機」を取り上げたいと思います。中国の仏教書「碧巖録」に「啐啄同時」（そったくどうじ）という言葉が出てきます。「啐」は「驚く、叫ぶ、呼ぶ」という意があり、雛が卵の殻を破って出ようと鳴く声のことを指します。「啄」は「ついばむ」という意があり、母鳥が殻を突つき割ることを指します。親鳥に温められた卵は、殻の中で少しずつ雛に成長をしていきます。親鳥が卵を温めている時、卵の中の様子を肌で感じ、もうすぐ孵化することがわかるのだと思います。卵の中で孵化した雛鳥は、卵の殻を突ついて割って出てこようとしますが、雛にとっては簡単な作業ではありません。そこで、頃合いを見計らって親鳥が、殻の外側から少しだけ突ついて割れ目をつくるのだそうです。両者のタイミングが一致して雛が生まれてくることから「絶好の好機、またとない好機」を表す言葉として「啐啄同時」（そったくどうじ）が生まれました。卵の中の雛が突ついているのを親鳥が気付かなかったり突ついていないのに親鳥が殻を破ったりしてもいけないのです。同時でなければなりません。

現在、5・6年生が、登校後の準備や給食の片付け、清掃等のお手伝いに来てくれていますが、全てをやってあげているのではなく、1年生が一人ではできなくて手伝って欲しいというサインを出した時に手を差し伸べてくれています。まさに、「啐啄の機」を逃さず、1年生が自立できる手助けをしてきています。このことを、親と子の関係や教師と児童という関係で考えてみたいと思います。子供は成長の過程で親離れをしていきます。親もこのタイミングで子離れをする必要があります。まさに「啐啄同時」が、子供の自立にとって大切です。ところが、子供は学校で集団生活をする中で、子供同士の関係が構築され、社会的な体験を積み重ねていく中で成長していきます。ともすれば、子供の親離れの方が早く、親の子離れの方が遅れたということも聞きます。さらに、学習活動における教師と児童の関係にも同じことが言えます。児童が知りたい、学ぼうとしているサインを教師が見逃してはいけないのはもちろんですが、子供がサインを出していないのに、教師が殻を突つことがよくあります。それでは「啐啄同時」とは言えません。内側から突つかせる準備や刺激を与えることが私たち教師に求められています。それができた時に、「主体的・対話的」な学びを子供たちに補償することができ、そして「深い学び」へ誘うことができます。

本校では、この後「縦割り活動」も始まりますが、十小の先輩たちが下級生を見守りながら、相手が必要としている時に、タイミングよく支援できる子供たちに育てて欲しいと願っています。私たち教師も「啐啄の機」を逃さぬ指導・支援を心掛けて参ります。



4/12 1年交通安全教室



4/22 1年ならし給食



4/26 6年挨拶運動



4/27 2・4・5年体育朝会